

FOUJITA

展覧会名:「フジター 色彩への旅」

会 期：2021年4月17日(土)ー9月5日(日) 会期中無休 ※会期中に展示替えがございます
主 催：公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館
協 力：公益財団法人平野政吉美術財団
会 場：ポーラ美術館
入 館 料：大人1,800円、シニア割引(65歳以上)1,600円(他の割引との併用不可)
大学・高校生1,300円、中学生以下 無料
※団体15名様以上割引 ※上記料金で常設展示もご覧いただけます。
〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285 TEL: 0460-84-2111(代表)

[同時開催]

HIRAKU Project vol. 11

岡田杏里「Soñar dentro de la tierra／土の中で夢をみる」

旅する画家が日本とメキシコで制作した、
壁画やインスタレーションをご紹介します

[常設展示]

モネー 光のなかに(会場構成：中山英之)

ポーラ美術館の名作絵画

ラファエル・コランと黒田清輝ー 120年目の邂逅



岡田杏里《ヒトの心の構造について》
2019年

報道に関するお問合せ

ポーラ美術館広報事務局

ブラップジャパン 担当: 屋木、名取

TEL: 03-4570-3172 / FAX: 03-4580-9128

MAIL: polamuseum.pr@prap.co.jp

住所: 〒107-6033 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル33F

私書箱562号

ポーラ美術館 広報担当: 田中

TEL: 0460-84-2111 / FAX: 0460-84-3108

住所: 〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285

EXPLORATIONS IN COLOR

COLOR

FOUJITA

フジター 色彩への旅

Press Release

【報道関係者各位】

2021年2月

2021.4.17|土|ー9.5|日|

ポーラ美術館

会期中無休 開館時間: 9:00ー17:00(入館は16:30まで)

主催: 公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館 協力: 公益財団法人平野政吉美術財団

入館料: 大人 1,800円、シニア割引(65歳以上) 1,600円(他の割引との併用不可)、大学・高校生 1,300円、中学生以下 無料

※団体15名様以上割引 ※上記料金で常設展示もご覧いただけます

〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285 TEL: 0460-84-2111(代表)

Open Daily Opening Hours: 9:00-17:00 (Last admission 16:30) Organizer: Pola Museum of Art, Pola Art Foundation

Support: Akita Museum of Art, Masakichi Hirano Art Foundation Admission: Adults: ¥1,800 Seniors (over 65): ¥1,600

University / High school students: ¥1,300 Junior high school students or younger: Free

1285 Kozukayama, Sengokuhara, Hakone-machi, Ashigarashimo-gun, Kanagawa 250-0631 <https://www.polamuseum.or.jp>

写真: マドレーヌ・ルクー《フジタの肖像》1931年 メゾン・アトリエ・フジタ

COLOR

POLA MUSEUM
OF ART
OF ART
POLA MUSEUM



《メキシコに於けるマドレーヌ》1934年 京都国立近代美術館

フジター色彩への旅

概要

世界的な画家になることを夢みて1913年、26歳で渡仏したレオナル・フジタ(藤田嗣治、1886-1968)は、旅先で目にした風景や人物、異国の歴史や風俗などに創作のインスピレーションを求めました。1920年代にパリの女性をモデルに「乳白色の肌」を完成させ、パリ画壇の寵児となったフジタは、その後、旅によって新たなモチーフや群像表現のための構図と、色彩豊かな表現手法を開拓していきます。

1929年の日本への一時帰国の後、パリを離れて南米へと旅立ったフジタは、中米から北米へと移動し、太平洋を渡って再び日本へとたどり着きました。東北や沖縄をはじめとする日本各地、そして中国大陸や東南アジアへと移動をつづけ、1949年にニューヨークに渡るまでは、旅先こそがフジタのアトリエでした。

本展では、フジタの旅とそれにとまなう色彩の変遷に焦点をあて、フジタの生涯の旅路と画業の展開をあらためてご紹介します。

- | | | |
|-----|---------|---------------|
| I | パリとの出会い | 「素晴らしき乳白色」の誕生 |
| II | 中南米への旅 | 色彩との邂逅 |
| III | アジア旅行記 | 色彩による大画面の絵画へ |
| IV | 心の旅行き | 色彩からの啓示 |



《二人の祈り》1952年 名古屋市美術館
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 B0513

みどころ1 世界を旅した画家フジタ

フジタといえば「パリ」や「乳白色の肌」、「猫」などを連想しますが、実は1930年頃から世界中を旅し、旅先をアトリエとして色彩豊かな作品を数多く描きました。とりわけ1930年代前半から中頃までの中南米や日本国内、中国への旅では、その土地の歴史や風俗、民具、建築などへの関心を高め、現地でのスケッチや旅先で撮影した写真、自ら収集した民俗資料などを画面に取り込むことによってオリジナリティーに溢れる絵画を制作しました。

みどころ2 新収蔵の「乳白色の肌」

ポーラ美術館は2019-2020年度に、「乳白色の肌」の手法による2点の油彩画と、連作「小さな職人たち」の中の1点である《猫のペンション》を新たに収蔵しました。1921年制作の《坐る女》は「乳白色の肌」の技法を編み出して間もない頃の肖像画であり、滑らかな絵肌と墨による繊細な輪郭線、柔らかなぼかしによって素朴な雰囲気 of 漂う作品であり、1922年のサロン・デ・ザンデパンダン展に出品された可能性の高い、フジタの初期の代表的な作品の1点です。

みどころ3 アパルトマンの壁画を再現

連作「小さな職人たち」は、フジタが戦後パリで暮らしたアパルトマンの壁を飾るために制作した色彩豊かな壁画です。15センチメートル四方の各パネルには、かわいらしい子どもたちが、古き良きパリの職業人たちに扮する主題などが油彩で描かれています。フジタは手仕事に打ち込む名もなき職人(アルティザン)たちの姿に自らを重ねていました。ポーラ美術館では、115点ほど飾られていたパネルのうちの96点を収蔵しています。今回の展示では、この作品群を一挙公開します。

Ⅲ アジア旅行記 色彩による大画面の絵画へ

中南米旅行の後、フランスに戻らず、日本に帰国して制作を行うことにしたフジタは、中南米で得た新たなスタイルにさらに磨きをかけるため、国内各地の旅をつづけました。人々の衣服や民具、建物など、行く先々の気候や光、湿度によって異なって見える対象の色彩を描き分けるように、おそらく色材の選択や重ね方を模索しながら、短時間のうちに色彩豊かな作品を仕上げる技術を身につけました。このような制作手法のレッスンは、1930年代半ばに集中的に挑戦した大画面壁画や、その後の作戦記録画の制作に活かされることになりました。第二次世界大戦後の1949年には、日本の美術界の混迷と決別するかのよう^つに、フジタはニューヨークへと旅立ちます。



《北平の力士》1935年 公益財団法人平野政吉美術財団



《客人(糸満)》1938年 公益財団法人平野政吉美術財団
展示期間：6/26 - 9/5

Ⅳ 心の旅行き 色彩からの啓示

1949年に渡ったニューヨークは、フジタにとって「旅の時代」の最終経由地となりました。長期滞在を覚悟していたこの街で、フジタはかつて自身のアイデンティティであった「乳白色の肌」を取り戻すべく濃密な創作活動を行い、マシアス・コモール画廊で開催した個展では上々の成果を収めます。しかしながら、翌年初めにフランス入国の許可を得ると、フジタはただちに君代夫人とともにフランスに渡り、以後、「フランス人」として生きていくことを決意しました。終の住処となったフランスでは、しばしば国内や周辺国への小旅行に出かけ、各地で集めた骨董品や自身の描いた絵画作品に囲まれた日々を過ごします。晩年には宗教画の技法も研究し、生涯の旅で広めた見聞だけでなく、心の旅路を糧として、画業の集大成となる作品を手掛けました。

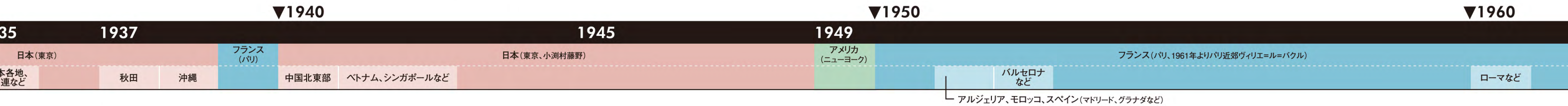


《ラ・フォンテーヌ頌》1949年 ポーラ美術館



《オランダの少女たち》1955年 ポーラ美術館

© Fondation Fuyita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 B0513



中南米の旅の記録

1931年11月、妻マドレーヌとともにブラジルのリオデジャネイロに到着したフジタは、商業都市サンパウロや「小巴里」と称されたアルゼンチンの首都ブエノスアイレスでの滞在を経て、翌年7月に南米中央に位置するボリビアの都市ラパス、そしてペルーの首都リマに足を踏み入れました。途中、標高3,800メートルにある自然豊かな「チチカカ湖」を汽船で渡り、マチュピチュの遺跡では神秘的な風景に心を奪われた、とのちに彼は語っています。10月にペルーを発つと、エクアドルの都市マンタ、パナマ運河、キューバの首都ハバナを経て、11月下旬にメキシコに到着しました。メキシコには7カ月滞在し、その間にタスコで美術学校の校長をしていた画家の北川民次とも出会っています。フジタは訪れた国々の歴史や風俗、生活用具、家屋などに関心を寄せ、仮面や土偶、玩具などを買い集めました。彼の収集品の中には入手した地名が書き込まれているものがあり、中南米の長い旅を跡付けています。



《アルゼンチンにおけるマドレーヌ》1932年
レオナール・フジタ(藤田嗣治)撮影 メゾン＝アトリエ・フジタ



《ペルーに向かうフジタ》1932年
撮影者不詳 メゾン＝アトリエ・フジタ



フジタ収集品 公益財団法人平野政吉美術財団

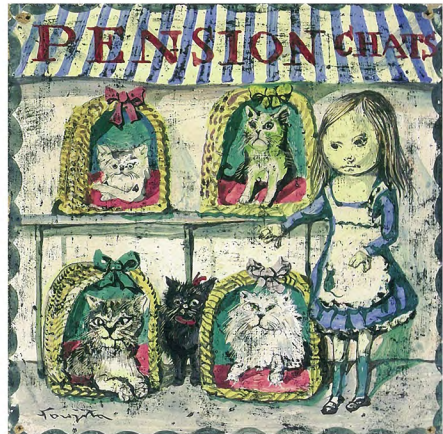


旅の終わりに―「小さな職人たち」

1950年、63歳のフジタはパリに帰還し、モンパルナスのカンパーニュ＝ブルミエール通りに居を構えます。旅と転居を繰り返したフジタが生涯一貫してつづけたことは、自宅を自らの手仕事により設え飾ることでした。旅先で買い集めた気に入りのオブジェや絵画を飾り、隅々まで工夫を凝らしたアトリエ兼住まいの空間は、フジタの人生を総括する創造物といえます。生涯の旅の終着を意識し始めたフジタは、連作「小さな職人たち」を壁に配したパリのカンパーニュ＝ブルミエール通りの住居、ヴィリエール＝バクルの家、そしてランスのノートル＝ダム・ド・ラ・ペ(平和の聖母)礼拝堂の空間づくりに情熱を傾けていきます。終の住処ともいうべきこれらの空間は、絵画や壁画だけでなく、キリスト教の信仰を誓う十字架が置かれ、祝祭的な彩りにあふれています。



カンパーニュ＝ブルミエール通りの室内



新収蔵作品 《猫のペンション》1959年頃 ポーラ美術館



《十字架》1966年 ポーラ美術館

I パリとの出あい「素晴らしき乳白色」の誕生

世界中から若き芸術家が集まり、キュビズムや未来派などの前衛美術が隆盛していた芸術の都パリ。1913年に初めてフランスに渡ったフジタは、西洋美術の歴史に深く関心を抱くとともに、個として自由に生きるパリの人々の生活に強く共鳴し、この街で画家として大成することを決意しました。初めはキュビズムの造形性に感化されますが、しだいにメランコリックな都市の風景やプリミティヴな曲線の特徴とする人物を描くようになります。第一次世界大戦後、乳白色の下地に極細の描線でモチーフを描く独自のスタイル「乳白色の肌」を生み出したフジタは、サロンでの成功を経て一躍、時代の寵児となります。



新収蔵作品 《坐る女》1921年 ポーラ美術館



《礼拝》1918年頃 ポーラ美術館



新収蔵作品 《イヴォンヌ・ド・ブレモン・ダルスの肖像》
1927年 ポーラ美術館

II 中南米への旅 色彩との邂逅

アメリカに始まる世界恐慌をきっかけとして、芸術の都パリにも時代の閉塞感が強まりだすと、フジタは「南米の上空を心行く迄吸って晴々」することを目的として、1931年に4番目の妻となるマドレーヌ・ルクーを伴って中南米へ旅立ちました。ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、メキシコなどを巡り、強い陽光のもとで輝きを放つ大地と自然、民族衣装をまとった現地の人々や土着の風俗、芸術に触れたフジタは、それらのあざやかで濃密な色彩に目を奪われます。これまでにない視覚体験を得たフジタの画面には、強烈なあざやかさと重厚なマティエールが表れるようになります。



《町芸人》1932年 公益財団法人平野政吉美術財団
展示期間：4/17 - 6/25



《室内の二人》1932年 公益財団法人平野政吉美術財団
展示期間：6/26 - 9/5



《カーナバルの後》1932年 公益財団法人平野政吉美術財団
展示期間：4/17 - 6/25

▼1910

▼1920

▼1930

1913		1913		1929		1931		1931	
制作の拠点	日本(東京)	フランス(パリ)		日本(東京)	フランス(パリ)	中南米—北米		北京	日本(東京)
旅行先		ロンドン	ロンドン		ニューヨークなど				

「旅の時代」へー 写真家としてのフジタ

1931年、パリを離れて南米へと旅立ったフジタは、現地の風景や風俗における強烈な色彩に感化され、市井の人々の姿を色彩豊かに描きながら中米から北米へと歩を進めました。その後、太平洋を渡り日本へとたどり着いたフジタは、まさに息つく暇なく東北や沖縄をはじめとする日本各地、そして日本が新たに進出した中国大陸へと旅をつづけます。フジタは旅の先々で現地の人々の営みや民族衣装、調度品、建物などに興味を抱き、しばしばそれらをファインダー越しにとらえました。フジタの終の住処となったヴィリエール＝バクルの住居兼アトリエには2,000点以上のネガフィルムが保管されていますが、その中から1930-1940年代に撮影された写真を厳選してご紹介します。



《メキシコの子どもたち》1932年



《北京の街角》1934年



《日本》1935年
以上、レオナール・フジタ(藤田嗣治)撮影 メゾン＝アトリエ・フジタ

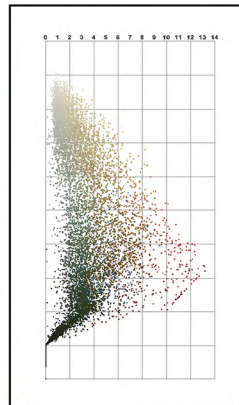
フジタの色彩を分析する

フジタは中南米への旅行によって、1920年代の絵画とは対照的な色彩豊かな表現手法を獲得します。それには日差し強い現地の風景や民族衣装、滞在先で目にした建物や壁画の色彩などの影響が指摘できます。たとえば、《メキシコに於けるマドレーヌ》では、淡い肌や衣服と背景の暗い空の明度対比(図A)、空の青緑と帽子の花飾りや衣服の花模様の赤などの補色色相とトーンの対比(図B)を主として色空間上でバランスをとり、色彩の対比と類似、微妙なグラデーションによって対象の「質感」を表現しています。本展では、色相、明度、彩度を3次元空間化したマンセル・カラー・システムを使い、主に旅先で制作した絵画作品を中心に、フジタの色彩の特質を科学的に分析します。

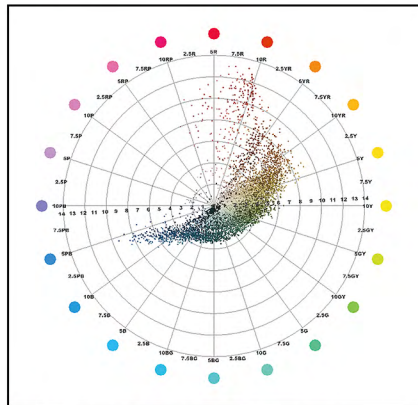
色彩分析・監修：三木 学(色彩研究者)／色補正：平井 経太(千葉大学大学院工学研究院准教授)



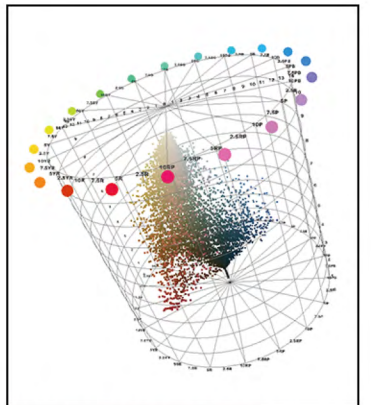
《メキシコに於けるマドレーヌ》1934年
京都国立近代美術館



図A 《メキシコに於けるマドレーヌ》の明度・彩度図



図B 《メキシコに於けるマドレーヌ》の色相・彩度図



図C 《メキシコに於けるマドレーヌ》の色立体
※作品画像から抽出した画素を3次元の色空間に再分布したもの